

ロータリーの神髄—職業奉仕を語る(I)



「江戸時代の商人道とロータリー」

パスト・ガバナー

神崎 茂

2007年は丁度明治維新後140年目の年に当たります。関ヶ原の戦いが1600年でその3年後徳川幕府が発足し、明治維新（1868年）まで265年の間が江戸時代で徳川時代とも云われます。この間戦争のない平和な時代でした。

1700年頃のロンドンの人口は100万人で世界最大都市と云われていますが、江戸は100万人～120万人であったので、ロンドンをしのぐ世界一の大都市でありました。京都は40万人、大阪が35万人でした。徳川家康の文教政策による活字印刷の発達によって書籍出版が盛んになり、ロンドンでの識字率が20%であったのに対して江戸でのそれは80%以上でありました。藩校、寺子屋、手習所で読み、書き、ソロバンと共に人間教育が行われ、江戸時代には育児や教育に関する書物が数多く出版されました。

又、「往来物」という庶民向け教材が大量にありました。大阪が爆発的に経済発展し、世界で最初の米の先物取引が行われ、世界の専門家の間では「堂島」の名はよく知られています。又、日光詣や伊勢参りとして一般の人々の旅行が大流行しました。

「江戸末期、明治初期において日本が西欧に遅れていたのは近代工業面のみで、近代工業を除いたら、日本はあらゆる面で西欧を上回るか同水準の異質な高度の文明が存在した。それは資源を過剰に消費せず、乏しい資源を

最大限に利用しながら生活を楽しみ、高い文化水準を維持した平和なものであった。近代工業以外は日本は全ての点で優れた国であった」とスーザン・ハンレスという女性が残しています。

ケンペルの記述によると「日本の国民は習俗、道徳、技芸、立ち居振る舞いの点でどの国よりも立ち勝り、国内交易は繁盛し、肥沃なる田畑に恵まれ、頑健強壮な肉体と豪胆な気性を持ち、生活必需品は有り余る程に豊富にあり、国内には不断の平和が続き、かくて世界でも稀に見る程の幸福な国民である」とあります。

明治維新後、政府は国策として徳川時代を封建時代として否定し西欧文化に追いつく政策をとり、文明開化、富国強兵、脱亜入欧を指向しました。

以上のような繁栄した時代の背景には優れた日本文化が生きていました。神道、佛教、儒教、道教、朱子学、景教（キリスト教）、武士道等の思想や宗教の流れがあります。

石門心学を開いた石田梅巖（1685-1744）は丹波豊岡の農家の出身で、当時商人蔑視の風潮の中で商人道を説き、1830年代の最盛期にはその講舎が34藩180個所に達するほどになりました。

「売物には念を入れる」高品質

「少しも粗相せずに売り渡す」優れたサービスの提供

「是まで一貫目の入用を七百匁にて賄い、是まで一貫目ありし利益を九百匁あるようにすべし」コスト低減

「お客様満足」

「利益は人々の世の中に貢献した報酬である」

「富の主は天下の人々なり」慈善活動、災害被害救済、人道支援

「人は一人勝ちでは生きてゆけない」共生

石田梅巖は以上のような言葉を「都鄙問答」（1739）、「齊家論」（1744）に書き残しています。これは近代経済学の祖と云われるアダム・スミスの「国富論」（1776）の37年前のことです。

又、行商から始まった近江商人の言伝えの中に「三方良し — 売り良し、買い良し、世間良し」「先も立ち、我も立つ」といった教えや家訓が今も残っています。近江（滋賀県）は京都に近い関係で古くから佛教の活動が発で多くの影響を与えています。

浄土真宗「幻々要集」に「・・・他を利するの心行によりて自ら利するの功德を受く。之を自利、利他円満の功德を云う・・・。」とあります。

商人ではありませんが農家出身の二宮尊徳の報徳（報恩）の理念が江戸の後期600以上の藩や村の財政の立て直しに貢献し、「働くことは端を楽にすることである」と云いました。

以上のように江戸時代に芽生え継承された商業道徳が、明治維新の後も受け継がれて明治以後の日本の資本主義と経済の発展につながって来たと言えます。

ロータリー精神を表す幾つかの言葉と江戸時代の先人達の言葉を並べると全く同じ意味に受け取れるように思われます。

「Service above self」（超我の奉仕）

近江商人「先も立ち、我も立つ」（売りや買いの相手方が成り立って、自分の方も成り立つ）

大丸呉服店家訓「先義後利」（義を先にして利を後にする者は栄える）

伝教大師最澄「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」

「He profits most who serves best」（最も良く奉仕する者、最も多く報われる）

決議23-34第1項「ロータリーは利己と利他の調和を目的とする人生哲学である」

浄土真宗「他を利するの心行によりて自らを利するの功德を受く。之を自利、利他円満の功德と云う。」

マックス・ウェバーはその著「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中でジャン・カルバンに由来する新教キリスト教の倫理、道徳が資本主義を築いたと主張していますが、江戸時代はもとより、日本の歴史と文化の中には西欧文化をしのぐ優れた思想や文化があり、行き過ぎた今日のマネーゲーム化した資本主義の行きづまりを脱却する理念が日本に於けるロータリー活動の中で生まれて来ても良いのではないかと思います。ロータリークラブ発足の初期にアーサー・シェルドンが「Service」と「職業奉仕」の理念を提唱し、100年の歴史が過ぎました。ロータリーの真髄ともいえる古典的職業奉仕の考え方が薄れてゆき、慈善活動（ボランティア活動、人道的奉仕）でその存在価値を高めようとしていると多くの日本のロータリアンが感じ始めています。綱領の中核である職業奉仕の理念の再構築によってロータリーの改革を日本のロータリアンによって始めるべき時であると思えます。